



オセアニア[豪州]

1 農・畜産業の概況

豪州の農畜産業は、国内総生産（GDP）の2.2%、就業人口の2.2%と、産業全体に占める割合は必ずしも高くない（2017/18年度（7月～翌6月））。しかし、同年度の総輸出額に占める農畜産物の割合は11.6%となっており、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積（7億7000万ヘクタール）の約半分に相当する3億7808万ヘクタールが農畜産業に利用されており、その大半は牛や羊の放牧地および採草地であり、小麦などを栽培する耕地面積は、3904万ヘクタールにすぎない（2018年6月末現在）。

豪州の農業従事者数は、高齢化による離農などにより2009/10年度以降減少が続いていたが、2013/14年度に増加に転じた。2016/17年度は30万4000人（前年度比5.2%減）と再び減少したものの、2017/18年度は、32万9300人（同8.2%増）と増加に転じた（表1）。

経営形態では、肉牛、羊、酪農などの専業経営だけでなく、穀物などとの複合経営も多いことから、農業従事者全体の約8割が、何らかの形で畜産経営に携わっているとみられる。

農畜産業生産額は、2000/01年度以降、おおむね増加傾向で推移していたが、2017/18年度は595億8100万豪ドル（同3.4%減少）となった（図1）。

内訳を見ると、牛（生体輸出用を含む）は120億2000万豪ドル（同1.0%減）と、牛肉生産量は増加したものの牛肉価格の低下により、わずかに減少した一方、羊は羊肉価格の上昇により39億7100万豪ドル（同11.4%増）となった。

生乳は、生乳生産量が増加や生産者乳価の上昇により、42億7000万豪ドル（同15.6%増）とかな

り増加した。この結果、畜産物全体では297億2600万豪ドル（同5.8%増）となった。また、農作物全体は、主要作物である小麦や大麦を中心に穀物の生産が減少したことから、298億5500万豪ドル（同11.0%減）とかなり減少した。

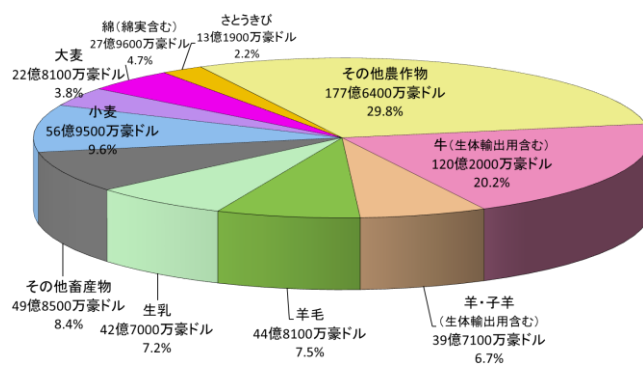
表1 農場数などの推移

(単位：戸、千人、豪ドル)

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
農場数	128,454	123,091	85,681	88,073	85,483
農業従事者	312.0	317.5	321.0	304.3	329.3
1農場当たり 農業粗所得	124,600	152,000	182,470	206,960	201,300

資料：豪州統計局（ABS）「Land Management and Farming in Australia」、
「Agricultural Commodities Australia」、
豪州農業資源経済科学局（ABARES）「Agricultural Commodity Statistics」、
「Australian Farm Survey Results」
注1：年度は7月～翌6月。農場数、農業従事者数は各年度6月末時点。
注2：2017/18年度は暫定値。
注3：農場数は、2015/16年度より調査対象となる農場規模が、推定農業収入額5,000豪ドルから40,000豪ドルに変更された。

図1 農畜産業生産額（2017/18年度）

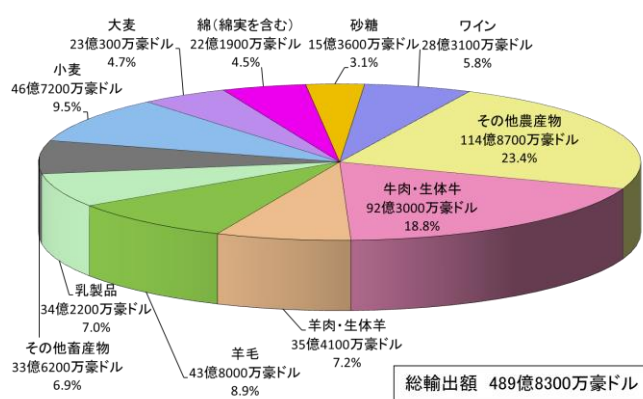


資料：ABARES「Agricultural Commodities」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：ABARESによる推計。
注3：割合は構成比。

一方、2017/18年度の農畜産物総輸出額（FOB）は489億8300万豪ドル（同0.1%増）となり、そのうち畜産物輸出額は239億3500万豪ドル（同14.0%増）と、牛肉の輸出増などにより増加した。

内訳を見ると、牛肉・生体牛が92億3000万豪ドル（同11.0%増）とかなり増加し、羊肉・生体羊が35億4100万豪ドル（同22.7%増）、羊毛が43億8000万豪ドル（同21.2%増）といずれも大幅に増加した。また、乳製品は、生乳生産量の増加、乳製品国際取引価格の上昇により輸出単価が上昇したことから、34億2200万豪ドル（同13.0%増）とかなり増加した（図2）。

図2 農畜産物総輸出額（2017/18年度）



資料：ABARES「Agricultural Commodities」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：割合は構成比。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

豪州の生乳生産は、天候や牧草の生育状況などによって大きく変動するとともに、酪農経営は、乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営がほとんどであり、気候条件に恵まれ、牧草の生育が良好なビクトリア（VIC）州を中心に行われてきた。しかしながら、最近では、同州でも度重なる干ばつのため、穀物や乾草などの購入飼料の利用も多くなっている。

生産される生乳の約7割が加工向けである。2000年頃には、製造される乳製品の約6割が輸出向けであったが、最近では生乳生産量の低迷や人口増による国内需要の増加により3割台に低下している。しかし、依然として輸出志向型の産業である。

① 主要な政策

生乳の需給管理を目的とした制度・政策は2000年に廃止され、生産者は、収益性や国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。デーリー・オーストラリア（DA）は、生乳の販売時に課される生産者課徴金などを財源に、販売促進や研究開発、マーケット情報の提供などを一括して行っている。

② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、2000年以降、酪農家の減少などにより減少傾向で推移したものの、2012年に増加に転じた。2016～17年は、生産者乳価の下落により乳用牛の淘汰が進んだが、2018年は生産者乳価の上昇により、156万1000頭（前年比2.7%増）となった（表2）。

表2 乳牛飼養頭数などの推移

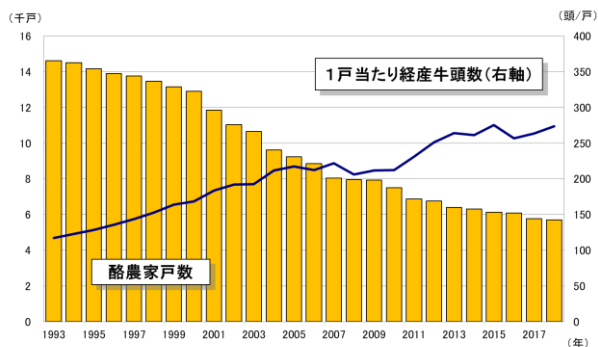
(単位：千頭、戸、頭)

区分/年	2014	2015	2016	2017	2018
乳牛飼養頭数	2,807	2,811	2,665	2,606	2,640
経産牛飼養頭数	1,647	1,689	1,562	1,520	1,561
酪農家戸数	6,308	6,128	6,079	5,771	5,699
1戸当たり経産牛頭数	261	276	257	263	274

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注：各年6月末時点。

酪農家戸数は、小規模農家の離農や高齢化による廃業などに伴い長期的には減少傾向にあり、2018年は5699戸（同1.2%減）となった（図3）。一方、1戸当たり経産牛飼養頭数は、274頭（同4.0%増）とやや増加した。

図3 酪農家戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移

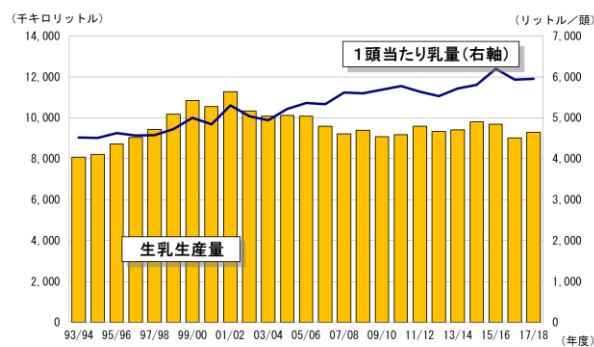


資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

生乳生産量は、1990年代から2000年代初頭までは、ガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向で推移してきた。しかしながら、2002/03年度から2009/10年度までは、干ばつなどの影響により減少傾向で推移し、その後は、おおむね横ばいで推移している。2014/15年度は、乳製品国際取引価格の上昇に伴い生産者乳価が上昇したことで増加したものの、2015/16年度は、乳製品国際取引価格の大幅な下落に伴い生産者乳価が下落したことに加え、乾燥した気候により放牧環境が悪化したことから、968万キロリットル（前年度比0.5%減）とわずかに減少した。2016/17年度は、生産者乳価がさらに下落したことから、多くの乳用牛が淘汰され、飼養頭数が減少したため、902万キロリットル（同6.9%減）とかなり減少した。2017/18年度は、生産者乳価がわずかに回復し、シーズン前半の気候がおおむね良好であったことから、929万キロリットル（同3.0%増）とやや増加した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧が中心であることもあり、日本や米国などと比較して少ない。近年は、補助飼料の給与増や遺伝的改良により、着実に増加してきたが、2017/18年度は、5951リットル（同0.4%増）と前年度並みとなった（図4）。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



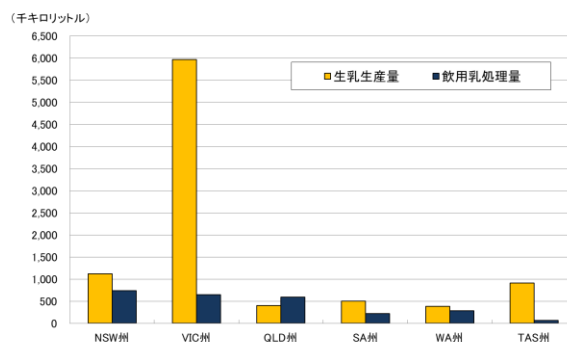
資料：ABARES 「Agricultural Commodity Statistics」
注：年度は7月～翌6月。

加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇し、2004/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、国内の飲用乳需要が堅調に推移していることから、2017/18年度は72.6%に低下している。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の64.2%を占め、最大の酪農地域となっている。ただし、飲用乳向けの生乳処理量は、大消費地であるシドニーを擁するニューサウスウェールズ（NSW）州が最も多い（図5）。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとに決めている生産者乳価については、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とでは、異なっている。

図5 州別生乳生産量（2017/18年度）



資料：Dairy Australia 「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：飲用乳処理量は州間移動を含む。

注3：QLD=クイーンズランド、SA=南オーストラリア、WA=西オーストラリア、TAS=タスマニア

③ 牛乳乳製品の需給動向

2017/18年度の主要乳製品の生産量について、脱脂粉乳は国際的に供給が増加し、価格が下落したため、19万900トン（前年度比14.1%減）、バターは7万9700トン（同6.8%減）と、いずれもかなり減少した。一方、生乳生産の3割が仕向けられるチーズは収益性が改善したため37万7700トン（同8.3%増）、同様に全粉乳は8万2500トン（同30.5%増）と増加した（表3）。

表3 牛乳乳製品生産量の推移

（単位：千キロリットル、千トン）

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
生乳	9,421	9,805	9,681	9,016	9,289
飲用向け	2,466	2,489	2,520	2,508	2,548
加工向け	6,955	7,316	7,161	6,508	6,741
バター	101.7	101.6	99.0	85.5	79.7
バターオイル	14.4	16.9	19.6	14.5	12.9
チーズ	311.5	344.1	344.3	348.7	377.7
脱脂粉乳	211.0	242.3	255.8	222.1	190.9
全粉乳	126.3	96.8	66.1	63.2	82.5

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：生乳の単位は千キロリットル、乳製品の単位は千トン。

2017/18年度の主要乳製品の輸出量は、チーズは16万6800トンと前年度同であったものの、バターは9700トン（同32.5%減）と減少した。一方、脱脂粉乳は15万6700トン（同2.2%増）、全粉乳は8万7600トン（同0.9%増）とわずかに増加した。また、常温保存が可能なロングライフ牛乳が主である飲用乳は、アジア向けが好調なことから年々増加しており、2017/18年度は21万7400キロリットル（同15.3%増）と引き続き増加した（表4）。

表4 牛乳乳製品輸出量の推移

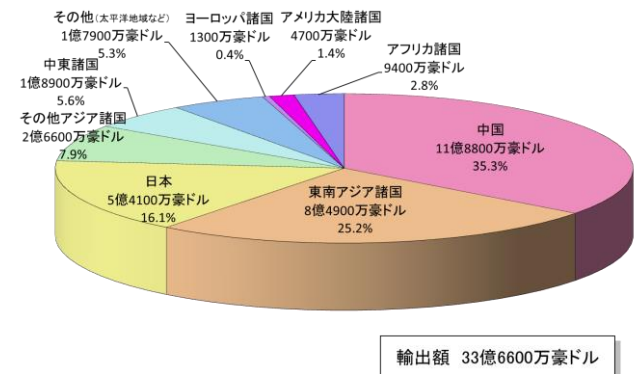
（単位：千トン、千キロリットル）

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18	輸出割合 (17/18)
バター	39.8	30.8	23.1	14.4	9.7	17.4%
バターオイル	7.6	9.6	8.4	5.6	5.1	
チーズ	150.4	157.7	171.3	166.8	170.9	45.2%
脱脂粉乳	143.2	184.8	181.4	153.3	156.7	82.1%
全粉乳	102.2	75.1	77.1	86.8	87.6	106.2%
飲用乳	118.1	147.7	179.3	188.6	217.4	7.0%

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：乳製品の単位は千トン、飲用乳の単位は千キロリットル。
注3：全粉乳は、輸入原料から製造した育児用調製粉乳の輸出量も含むため、輸出量が生産量を上回った。

乳製品の輸出額は、アジア地域向けの割合が高く、全体の84.5%と、圧倒的なシェアを占めている（図6）。国別にみると、2014/15年度までは、輸出額ベースで日本が最大の輸出先国であったが、2015/16年度以降、中国が最大の輸出先国となっている。チーズは輸出量の半分が日本向けとなっている。また、粉乳（脱脂粉乳および全粉乳）は、育児用粉ミルクなどを含め約9割をアジア地域向け（中国、東南アジア諸国が中心）に輸出している。

図6 地域別乳製品輸出額（2017/18年度）



資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

2017/18年度の主要乳製品の1人当たり消費量のうち、飲用乳は102.9リットル（前年度比0.2%増）と前年度並みとなった（表5）。また、乳製品については、ヨーグルトとバターはわずかに減少する一方、チーズはわずかに増加した。

表5 1人当たり年間牛乳乳製品消費量の推移

（単位：リットル、キログラム）

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
飲用乳	105.7	105.1	104.9	102.7	102.9
チーズ	13.5	13.5	13.6	13.4	13.6
バター	4.0	4.3	4.9	4.8	4.7
ヨーグルト	7.4	9.2	9.2	9.1	9.0

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：飲用乳の単位はリットル。
注3：乳製品の単位はキログラム。

④ 乳価の動向

酪農・乳業は輸出志向型産業であることから、生産者乳価は、乳製品の国際市場の影響を強く受ける。2013/14年度は、アジア地域や中東諸国からの強い需要に伴う乳製品国際価格の上昇により大幅に上昇した。2014/15年度は、世界的な供給過剰と、

主要な輸入国である中国の需要減退により乳製品国際価格が下落したことにより、2015/16年度も引き続き低下した。2016/17年度は、一部の大手乳業メーカーが、乳製品国際市況の回復や集乳量減少への対策として年度途中で生産者乳価をわずかに引き上げたものの、全体としては3年連続で低下した。2017/18年度は、豪州産乳製品に対する需要が高いことを背景として、前年度比12.5%高の1リットル当たり46.0豪セントと4年ぶりに前年を上回った（表6）。

表6 生産者乳価の推移

（単位：豪セント/リットル）

年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
生産者乳価	51.2	48.5	44.9	40.9	46.0

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注：年度は7月～翌6月。

（2）肉牛・牛肉産業

豪州の肉用牛生産は、酪農と同様、放牧を取り入れた飼養方法が中心となっている。また、牛肉生産量の約7割を輸出に仕向ける輸出志向型産業である。

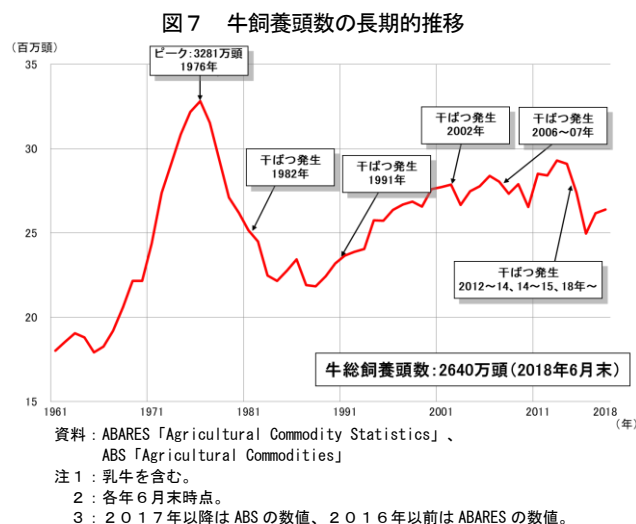
肉用牛は、粗放的な飼養管理が可能のため、乳牛に比べると利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地帯などの自然条件の厳しい地域でも、熱帯品種を導入することなどによって飼養が可能となる。このため、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で、多種多様な品種の生産が行われている。

① 主要な政策

肉用牛や牛肉の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、気象動向や国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを、アニマル・ヘルス・オーストラリアが家畜疾病の管理・監督や情報提供などの家畜衛生に関する業務を、全国残留検査（NRS）が残留物検査を行っているが、これらの事業財源の多くは、生体の取り引き（販売）時に課される生産者課徴金によるものである。

② 牛の飼養動向

豪州の牛飼養頭数（乳牛を含む）は、長期的な推移を見ると、1960年代後半から70年代半ばにかけて、世界的な牛肉需要の増大を背景に急激に増加し、1976年には過去最高の3281万頭を記録した。その後、第二次オイルショック（1979年）などによる世界的な牛肉需要の減退や肉用牛経営の悪化、大干ばつの発生（1982年）などにより、1988年には2185万頭と、ピーク時に比べ3分の2まで減少した。それ以降は、主に干ばつなど天候の影響を受けながらも緩やかな増加傾向で推移した（図7）。



2000年以降は、2006年から2007年にかけて大規模な干ばつが発生したが、世界的な牛肉需要の高まりを背景に、飼養頭数は堅調に増加し、2013年には2929万頭の高水準となった。

しかし、2012年後半から2014年および2014年から2015年に東部で再び大規模な干ばつが続けて発生したことで、牛の早期出荷や繁殖雌牛の淘汰が進み、飼養頭数はかなり減少した。2017年は、天候の回復に伴い牛群再構築が進んだことで、2618万頭（同4.8%増）と増加した。2018年1月から再び東部を中心とした干ばつが発生しているものの、2018年6月末時点の飼養頭数は、2640万頭（同0.8%増）とわずかに増加した（表7）。

表7 牛飼養頭数の短期的推移

(単位：千頭)

区分/年	2014	2015	2016	2017	2018
肉用牛	26,296	24,602	22,306	23,570	23,768
乳用牛	2,807	2,811	2,665	2,606	2,627
合計	29,103	27,413	24,971	26,176	26,395

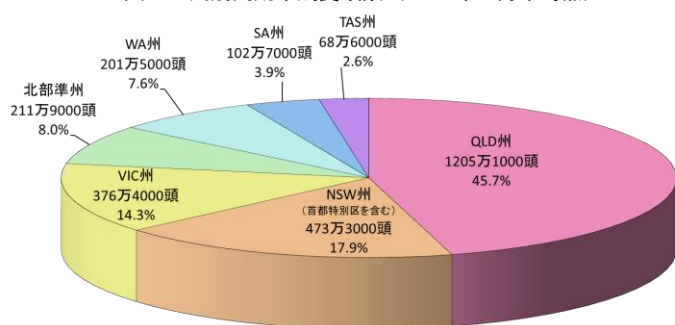
資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、
ABS「Agricultural Commodities」

注1：各年6月末時点。

2：2017年以降はABSの数値、2016年以前はABARESの数値。

牛飼養頭数を州別に見ると、クィーンズランド（QLD）州が全体の45.7%、NSW州が17.9%、VIC州が14.3%と、東部3州で全体の8割近くを占め、肉用牛供給の根幹を成している（図8）。

図8 州別肉用牛飼養頭数（2018年6月末時点）



資料：ABS「Agricultural Commodity」

牛飼養頭数 2639万5000頭

③ 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛と畜頭数（子牛を含む）は、2012/13年度から2014/15年度にかけて発生した干ばつにより増加傾向で推移した。

しかし、2015/16年度は、前年度までの干ばつによる繁殖雌牛を中心とした淘汰の増加により牛飼養頭数が減少したことに加え、草地環境の好転に伴い牛群再構築を進めたことから、879万7000頭（前年度比12.9%減）と、大幅に減少した。その後、2016/17年度は、牛群再構築のため雌牛を中心とした保留が継続したことにより、大幅に減少したものの、2018年に発生した干ばつ^{とつた}の影響により2017/18年度は、791万3000頭（同6.6%増）とかなり増加した（表8）。

平均枝肉重量は、2013/14年度は、干ばつに

伴う牧草の生育環境の悪化などにより減少した。しかし、2014/15年度以降は、と畜頭数に占める穀物肥育牛の割合の増加により増加傾向で推移しており、2017/18年度は、297.0キログラム（同1.3%増）と増加し、過去最高水準となった。

以上から、2017/18年度の牛肉生産量（子牛肉を含む。枝肉重量ベース）は、223万8000トン（同8.2%増）となった。

表8 牛肉需給の推移

区分/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18
と畜頭数(千頭)	9,473	10,103	8,797	7,423	7,913
生産量(千トン)	2,464	2,662	2,344	2,069	2,238
平均枝肉重量(kg)	276.4	278.4	283.1	293.2	297.0
輸出量(千トン)	1,184	1,349	1,167	963	1,078
1人当たり消費量(kg)	29.6	27.4	24.6	25.4	-

資料：豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）「Statistical Database」、
ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

2：生産量および1人当たり消費量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース。

3：と畜頭数には子牛を含む。

4：生産量、輸出量および1人当たり消費量は子牛肉を含む。

5：平均枝肉重量は成牛のみ。

イ 輸出動向

牛肉輸出量（船積重量ベース）は、2012/13年度以降、牛肉生産量の増加に伴い増加傾向で推移しており、2014/15年度は、過去最高の134万9000トン（前年度比13.9%増）となった。しかし、2015/16年度は、牛肉生産量の減少を受け、かなり減少した。また、2016/17年度も、引き続き減少し、5年ぶりに100万トンを下回った。2017/18年度は牛肉生産量の増加により、107万8200トン（同12.0%増）とかなり増加した。主要輸出先別に見ると、日本向けは、牛肉需要の増加により30万7300トン（同10.2%増）、米国向けは、赤身率の高い牛肉の需要が強く、牛肉需要の回復により、23万4800トン（同12.1%増）とかなり増加した。（表9）。

表9 牛肉の国別輸出量の推移

(単位：千トン)

国名/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18	輸出シェア (17/18)
日本	279.7	303.5	268.4	278.8	307.3	28.5%
米国	265.9	471.2	334.3	209.4	234.8	21.8%
韓国	155.7	156.9	173.2	162.1	156.2	14.5%
中国	160.4	124.8	127.6	97.5	133.4	12.4%
その他	322.7	292.6	263.5	215.2	246.4	22.9%
合計	1,184.4	1,349.0	1,167.0	963.0	1,078.2	100.0%

資料：豪州農業・水資源省 (DAWR)

注1：年度は7月～翌6月。

2：船積重量ベース。

ウ 消費

1人当たり食肉消費量を見ると、牛肉および羊肉は、小売価格の上昇に伴い減少傾向で推移している一方、鶏肉は、他畜種と比べて安価であることや消費者の健康志向を受けて増加傾向で推移しており、2000年代後半以降、最も消費されている食肉となっている。また、豚肉も、食習慣の変化やアジア系移民の増加により増加傾向で推移している。

2016/17年度は、鶏肉が48.8キログラム(前年度比0.7%増)とわずかに、豚肉も27.7キログラム(同0.5%増)とわずかに、牛肉も25.4キログラム(同3.4%増)とやや増加した。一方、羊肉は、小売価格の上昇により8.3キログラム(同6.2%減)と減少した(表10)。

表10 1人当たり年間食肉消費量の推移

(単位：キログラム)

区分/年度	11/12	12/13	13/14	14/15	15/16	16/17
牛肉	28.9	30.6	29.6	27.4	24.6	25.4
羊肉	9.4	9.7	9.0	9.2	8.8	8.3
豚肉	25.7	26.5	24.8	27.3	27.6	27.7
鶏肉	43.7	43.9	44.7	45.5	48.5	48.8
合計	107.7	110.7	108.1	109.4	109.5	110.3

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

2：牛肉には子牛肉を含む。

④ 生体牛輸出

生体牛輸出は、東南アジア諸国向けの肥育もと牛が中心となっており、中でも全体の過半を占めるインドネシア向けの動向に左右される。2011/12年度および12/13年度は、同国の国内生産振興のための輸入制限的な政策を反映し一時的に減少したが、2013/14年度以降、同国の輸入制限の緩和により再び増加した。しかし、2015/16年度はイン

ドネシア政府による輸入許可頭数の制限を受け、123万8900頭(前年度比9.9%減)とかなり減少した。輸入許可頭数による制限は、2016年をもって終了したものの、同年10月からは、新たに肥育もと牛5頭の輸入に対し、繁殖用雌牛1頭の輸入を義務付ける政策が導入された。加えて、豪州の牛飼養頭数減少もあり、2016/17年は大幅に減少し、4年ぶりに100万頭を下回った。2017/18年度は、ベトナム、中国、マレーシア向けなどの増加により、95万7500頭(同7.3%増)とかなりの程度増加したが、インドネシア向けは同1.5%減となった(表11)。

表11 生体牛の国別輸出頭数の推移

(単位：千頭)

国名/年度	13/14	14/15	15/16	16/17	17/18	輸出シェア (2017/18)
インドネシア	623.7	744.9	563.0	518.6	510.9	53.4%
ベトナム	131.0	308.6	286.5	160.4	169.1	17.7%
中国	94.1	79.4	118.0	68.1	96.3	10.1%
トルコ	0.0	2.4	17.8	43.5	40.1	4.2%
イスラエル	107.7	65.7	82.5	45.8	38.5	4.0%
マレーシア	55.3	52.9	40.3	24.3	29.9	3.1%
日本	11.6	9.9	9.0	11.9	14.5	1.5%
フィリピン	19.6	27.0	26.9	1.5	7.6	0.8%
その他	88.4	84.4	94.9	18.2	50.5	5.3%
合計	1,131.3	1,375.1	1,238.9	892.5	957.5	100.0%

資料：MLA「Australian livestock export industry statistical review」、
「Live Link」

注1：年度は7月～翌6月。

2：乳牛を含む。

⑤ 肉用牛価格の動向

2017年の肉用牛の家畜市場加重平均価格は、1キログラム当たり493.6豪セント(前年比6.5%低)とかなり下落した(表12)。これは、牛飼養頭数の増加により取引頭数が増加したためとみられる。

表12 肉牛価格の推移(枝肉換算)

(単位：豪セント/キログラム)

区分/年	2013	2014	2015	2016	2017
若齢牛	328.7	346.7	496.6	605.5	557.7
肥育牛	318.1	337.1	486.0	554.2	524.4
経産牛	247.4	275.3	418.6	468.0	436.3
加重平均	287.3	308.0	456.5	527.9	493.6

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：いずれも、主要家畜市場の価格。

2：肥育牛は生体重500～600キログラム、
経産牛は同400～520キログラム。